

## 論 文 の 要 旨

ふ り が な 氏            名	そん うけい  孫   于恵
論 文 題 目	消費文化を映す日本現代文学の<悪女>考 ——東野圭吾の推理小説を中心に——
<p>論文の要旨</p> <p>日本国内外の東野圭吾についての研究は90年代の後半から始まったのだが、これまでの研究にはいくつかの問題点がある。</p> <p>まず既存の研究では、日本国内の消費市場における「東野」文学に関する研究が極めて少ない。特に新型コロナウイルス感染症の「東野」文学の伝播状況への影響について、まだ明白にされていない。</p> <p>次に、消費文化における「東野」文学の受容状況、または消費文化と「悪女」という要素の関係にあまり触れられていない。日本国外の消費市場における「東野」文学は主に中国市場に絞って分析されており、欧米市場については言及されていない。</p> <p>最後に、日本国内では東野圭吾が描いた女性像についての研究もなされてきたが、主に東野圭吾を取り巻く女性からの影響という面から分析が行われており、作品中の悪女像をテーマにした研究は少ないのが現状である。日本国外における先行研究では女性像について、単純に「悪女」と「聖女」とに分けて論じられてきたが、この区分の妥当性には疑問符がつく。また「悪女」の本質に関わる問題にも触れられていないため、より深く掘り下げて検討する必要がある。</p> <p>上記を踏まえた上で、次の三点を本研究の目的とする。</p> <p>第一に、まず、既存の研究には「消費文化」に関する定義が欠けているため、「消費文化」の概念とその意義を文化経済学の視点から定置する。消費文学市場における「東野」文学に関する研究は少ないため、まずは消費文化を映す「東野」文学の状況について整理する。次に、消費文化と「悪女」の繋がり、すなわち「悪女」に関わる文学作品の販売状況についてできる限り整理する。</p> <p>第二に、国語辞典に定義された「悪女」という言葉の変遷と意味を調べ、消費文化を映す現代の&lt;悪女&gt;がどう受容されているかをできる限り明らかにする。日本文学の研究状況として、悪女に限定した研究は極めて少ない。本研究ではまず、文学上の&lt;悪女&gt;とは一体何で、どのような条件で&lt;悪女&gt;と呼ばれるのか。男女それぞれの、どのような願望が表象されているのかについて整理、検討する。</p> <p>第三に、多くの推理小説では、男性に比べ体力的に弱い女性が被害者になりがちであるが、東野圭吾の作品では「事件の陰に女あり」というように、女性が直接犯罪に手を下すのではなく、事件の陰で男性を操る女性像がしばしば登場してきた。このような女性が演じる加害者を単に「悪女」と呼ぶのが妥当かどうかについて検討する。最後に「東野式」の悪女から東野圭吾の女性観についても検討する。</p> <p>第一章ではまず、「消費文化」の概念とその意義について検討する。日本国内の消費市場における「東野」文学に関する研究は極めて少ないため、文学の消費市場に関わる新聞記事などを整理した上で、「東野」文学の受容の現状について検討した。日本国外の消費市場については、東アジア（中国と韓国）および欧米の消費市場について、「東野」文学の販売数と映像化の現状に絞って分析した。最後に、COVID-19の世界的流行に伴う「東野」文学の現状についても論じる。</p>	

第二章では、まず儒教社会と日本人女性の生き方を整理した上で、儒教的価値観の中での男女関係が「良い女」と「悪い女」に区別されることを明らかにした。次いで、マルク・ブロックの『比較史の方法』で提唱された比較の方法論である「小範囲の比較」と「全体的比較」に基づいて、東野圭吾の推理小説中の「悪女」を絞りこむ。加えて、推理小説の世界で悪女はどのように描かれてきたのか、さらに日本文学の世界で「悪女」がどのように描かれてきたのかなどについても検討する。東野圭吾の一部作品に影響を与えた、松本清張の作品における悪女像についても適宜参照しつつ、推理小説世界の悪女イメージから議論を進め、東野圭吾の作風が直木賞の選考委員の視点から明確にされたことを論述する。

第三章では、国語辞典における「悪女」という言葉の変遷と意味を明らかにし、消費文化を映す現代の〈悪女〉がどのように受容されているかを可能な限り明らかにした。次に、なぜ日本で女性が「悪女」と表現され、その表現がこれまで使われ続けてきたのか。現在の〈悪女〉の意味を探り、それが過去に使われてきた意味とどう異なるかを比較、検討した。また文学上の〈悪女〉とは一体何であるのかについて、「プロ悪女」と「アマチュア悪女」とに分けて論じた。〈悪女〉と呼ばれる際の条件についても、男性側と女性側とに分けてまとめた。最後に、〈悪女〉が男女それぞれのどのような願望を表象しているのかについて検討した。

第四章では、二項対立という研究方法を用いて、東野によって描かれた女性人物の構造について検討した。二項対立とは論理学用語で、二つの概念が互いに矛盾や対立をはらむことであり、元々は一つの概念であったものを二分することにより、それを矛盾や対立関係へと持っていくことを言う。一般的には「善」と「悪」の対立概念、「警察」と「犯罪者」のような対立する社会的アイデンティティや同一人物とはまったく異なる対立評価などは、推理小説に典型的な二項対立の要素として多く見られる。しかし東野の推理小説には、犯罪者が最後に法から逃れることや、体力の弱い女性が強い男性を倒すこと、また被害者が加害者になるような反二項対立的な要素が多い。本章では作品におけるそれぞれの二項対立要素についての分析を通して、東野圭吾の女性観についても探究した。また、第三章で論じた〈悪女〉の条件から見ると、「東野式」の悪女は一つか二つの条件しか満たしていないため、普遍的な意味での悪女とは同一のものとは言えず、その意味では「ファミ・ファタル」と呼んだ方が相応しいということを論証した。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。